

母の百三歳の誕生日

赤谷慶子

我母は霜月に百三歳の誕生日を迎へたり。百歳の紀壽を迎へしより間もなく、獨逸在住の妹夫婦來日し、近しき親戚招待の上、小宴を開けり。然れども今年は妹夫婦十年滞在せし獨逸・ムンスターよりカナダのトロントへ戻りたりき。獨逸國籍の義弟も傘壽となりて、膨大なる家具等の家移りと重なり、此度の來日を思ひ留まりたり。トロント郊外の一萬坪の豪邸は既に賣りしかど、貸せる三百坪の長屋を完全修復しそこへ戻りき。

老母は紀壽の誕生日には己にて牛焼肉切り分け食したりしものを、昨年よりはマンゴープリン等おやつにとりて代はりき。さながら母はおのれの齒なれば、食物を嚙むことは容易なりとも、誤嚥性肺炎を患ひしたため、飲み込む能力衰えトロミを付けざらば飲み込む事叶はず。随ひて今年もプディング類を従姉妹たちと食すれど、量的には激減せり。会話を樂しむほどに覺えず一時間を経たり。花束等誕生日のこころざし多く拜領し、笑顔絶えざりき。

一年前の夏に老母は體調不良となり、敬虔なるカトリック教徒なる義弟のたつての願ひにより教会の大切なる祕蹟の一つに、「病者の塗油（びょうしゃのとゆ）と呼ばれる儀式ありて、高輪教會の神父より授かりき。母はこれにていつ神に召さるとも安心と想ひたればならむ、元氣を回復せり。信仰心とは素晴らしきものなり。母は當分健やかに日々を暮すを得るに相違なし。

（令和七年十二月三日受附）